

第4回 長良川遊水地河川環境調査検討会 議事要旨

日時 : 令和7年10月2日(木) 10:00~12:00
場所 : 木曽川上流河川事務所(木曽川ダム統合管理事務所 2階会議室)
出席者: 藤田 裕一郎 岐阜大学名誉教授(委員長)
西條 好迪 (一財)自然学総合研究所 理事・顧問
森 誠一 岐阜協立大学 地方創生研究所 教授

【議事】

(1) これまでの検討経緯について

事務局から、過去の委員会での検討内容や確認事項の説明があり、移植する種の選定や移植先の考え方、長良川遊水地の整備における河川環境保全の基本的な考え方が再確認された。

(2) 美濃市地区の整備に係る動植物の保全対策について

事務局から、事業の施工手順、本年度施工予定工事の位置と内容、影響範囲における重要種への対応、植物の事前調査および法令に基づく生息状況調査、河川水辺の国勢調査(底生動物)の結果の説明があり、質疑の結果、内容が了承された。

(3) 関市地区の整備に係る動植物の保全対策について

事務局から、本年度は施工予定工事がないこと、モニタリング範囲での生息環境調査および河川水辺の国勢調査(底生動物)、令和6年度の移植個所モニタリング調査の結果についての説明があり、質疑の結果、内容が了承された。

(4) 今後の予定

事務局から、説明があり、了承された。

以上の質疑における主な意見は以下のとおり。

【主な意見】

(これまでの検討経緯について)

- 説明文で、「湧水を必要とする魚類」という表現は「湧水に依存性」または「湧水に強く影響を受ける」等の表現に改めた方がよい。
- 間接的な影響を受けると考えられる範囲について、上下流端の設定の考え方を示すこと。
- 濁水のみならず、流出した土砂がネコギギやオオサンショウウオの生息や繁殖の環境に影響を与えると考えられたため、注意する必要がある。

(美濃市地区の整備に係る動植物の保全対策について)

- 国内移入種のギギは特定外来生物ではないが、ネコギギにとっては生息環境等が重なり、より大きいことから、増加した場合、脅威となる可能性が高いので留意してほしい。議論はあるが、ギギの駆除や隔離等を検討することも考えられる。
- 樹木が伐開されると、日照条件が変わり、多くの草本類が発芽・生育すると考えられる。その中には重要種、外来種が含まれる可能性があるため、今後注視してもらいたい。

- 遊水地予定地は、元々、定期的に出水の影響を受ける氾濫原の環境で、陸化して耕作地に利用してきたとすれば、氾濫原の環境に戻すという考えもあっても良いのではないか。
- 周囲堤の周囲や、その上下流の岸際は、積極的に氾濫原環境を整備していくことが考えられる。
→ 氾濫原環境の整備は、ご指摘を踏まえて検討していきたい。一方で、中島は過去に人為的に造成され、中島の上流端にある床止めによって内川の流れが安定している可能性がある。現状を整理して報告させていただきたい。
- 左岸の護岸整備について、施工に伴う騒音・振動等の水中の生物への影響等を確認してほしい。

(関市地区の整備に係る動植物の保全対策について)

- 生息環境の確認について、事業の進捗にともなって今後も土砂の堆積等が懸念されるので、引き続き、横穴や水中での樹木の根の状況等を確認してほしい。
- 昨年度実施した、事業地の下流側左岸の河道掘削は生息環境への影響はないのか。
→ 平水位以上の河道掘削であり、今回の調査結果では、影響は生じていないと考えられるが、注視していきたい。

(今後の予定)

- 内川の環境の保全について、現在の流路が残せるか説明して欲しい。
→ 周囲堤の整備により、内川の現在の流路は影響を受ける予定。内川を遊水地内に新たに創出することになると考えている。中島や内川の形成過程、既存の構造物等の状況を整理したうえで、遊水地内の利活用については美濃市と連携して今後検討していきたい。

(その他)

- カワラハハコ等の生息環境は、出水で定期的に流される礫河原であるため、移植個体が流出しても、移植場所の選定が悪いということではないと考えられる。
- カワラハハコ等の移植場所は、遊水地予定地の上流域も含めて検討してほしい。
- 移植場所周辺の低木が高木化すると水の流れが抑えられてカワラヨモギ等の生育に適さなくなる可能性があるため留意すること。
- 外来種である付着藻類のクチビルケイソウが長良川の上流側で見つかっており、本種が繁茂するとアユの摂食の妨げなることが懸念されるので、今後留意してほしい。

以上